

特43
567

梅見の時

成駒

一名成駒
福如洋行

成駒
福如洋行

074753-000-4

特43-567

梅見時春の成駒

岩原 梨園子/編

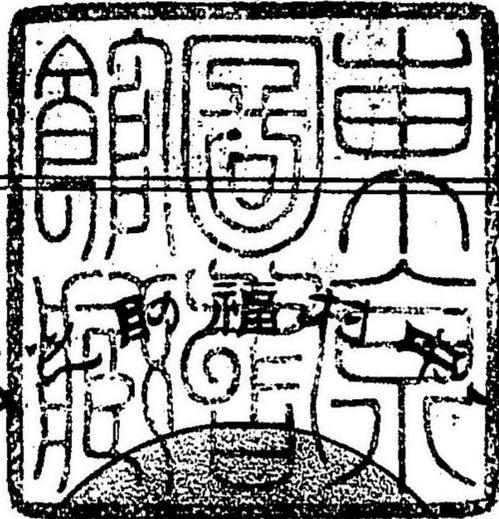
M21

CEK-0020



特43
567

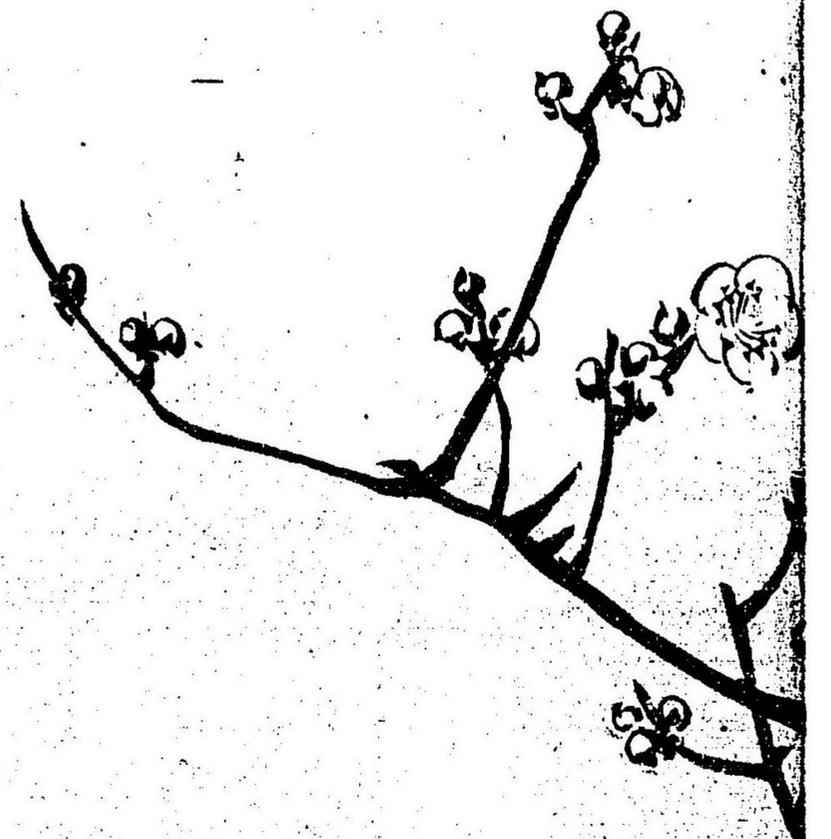
No 8949



像 尊 福 明 宗 永 保



郎 二 榮 本 山 名 實



人々置いて他々需むる者なく萬口一音成駒屋福助其者
ありとハ蓋し争はれぬ鑑定といふべし然るも芝居道
關係せる人は暫く措き同人を眷愛さるゝ人々ふして同
人比履歴若しくハ平素の品行等詳しく知らるゝ人の少
あきより今回最も信用すべき人ふ付て百方聞糺とある
上その事實ふ聊か修飾を加へて綴り成し福助は斯る身
の上なるう如何ふも殊勝の者ありいよゝ感心の役者
なりとの事を編者ともふ同人を愛顧さるゝ方々ふ知
らせ參らせんと所謂好事の意も出たるも此ふれハ乞
ふその心して讀たまえん事を扱同人の詳傳と掲ぐるふ

先立ち一般人氣の模様且つは一時病中の景況等は實に
豫想外の事のみあれハ其概略を記しつけんも亦蛇足の
業ふはあらざるへき東西ゝ先づハ評判のそじまり
左やう

成駒屋福助の宅ふハ何々おしろい何々洗ひ粉何々が
け(是は鬚ひも)何々香水何々しやぼんと女中方の化粧
粧ふ入用の品を色々取次ませは皆福助の好とたと申
を事で然れば賣れるともゝといふ程大勢は來ませ
んが大概は車馬車ふ乘て來る人が多く自身ふハ這
入りおねて戶外うら見て居て馬丁或は車夫を入れて

買はせるが通例なれど中よは立派な奥様らしいのが
ツカ／＼臺所へ行つてお釣りは入ませんと出
黒さまを二枚も三枚も出してお釣りは入ませんと出
て行くと云ひまきが是れを人頼みでは銀座あたりで
買たのめも知れぬと云ふ疑念が有るあらの事でせう
如何さま相撲膏は回向院前細見を仲比町都て本元で
買ふに限る様で又さ或日芝邊うら日除けよきるか
らやて福助の幕を貰ひよ来て二張持て歸つた人があ
りましたが禮よ同人の着る洋服を一具よおしたれは
是は氣の毒よと其代價を他で聞て見ると仕立ばかり

四拾餘圓とは何と魂消た事ではありませぬ
二百圓のお灸と云ふ何の失策でもしたやうだが福助
を兎角丈夫な方て無い處うら下谷廣小路の寄席本牧
亭は母の續き合ゆる同亭の主人が心配して灸を勧め
ると福助の云ふよお灸は否たが指輪を買つて呉れ
るなら据やうと云ふので指輪くらゐで身体が達者よ
なる事あらと早速相談が極り其指輪と聞くと代價
が金二百圓たと聞て流石に灸も急の事よといりず本
人よサア据やうサア如何たど催促するので終よ二百
圓のお灸が有つとや三ツ四ツ据ゑたいといふ人が

澤山ありませう

マア大變福ちやんが舐られたとサナニ福ちやんが舐められたオ、大變た斯うしては居られさいさうしてマア何處をへ能くを分らさいが何れ顔たらふ、ナニ顔顔からバマアまたア安心しよ、何たね顔から能ッて顔が一ばん大切たそ子お前さん氣ても違けたの、イ、エサマア憤りさいでお聞よ夫れを成程お前さんのお云の通り顔は大切よ違ひさいサた多れど顔を舐えられても何ん夫れで福ちやんが一生疵物よありもえさいさソラ夫れたうら同じ舐められるものからマダ顔の

方が能いではさいうへ、あれさ何を云ッてるンたの些とも嘸しが分りそとさい夫れをさうとマア誰が舐めたンたらふねエ勿体さい真さか蠅蚰ちやアあるまいねエ、ナニ蠅蚰嫌ひたよ妾は本統に福ちやんが蠅蚰よ舐められて彼の奇麗な顔へ兀でも出來様もンから夫れこそ生ては居ませんよア、縁喜でもさい鶴龜く、併し本統よ何が舐めたらふねエ氣味の悪い心配たねエ氣にふるねエとまた誰も知らさいから騒がさいが知めて居ればお嬢様がたや赤襟猫ちやん(中には能い年のも)達の中よ一大騒動が起るよ違ひさい壯士の運動

會ぐらゐるの事はあるよ相違あゝ中よは隨ぶん發狂するもあろう知れあゝ處を先へ新聞屋の耳へ這入めたれで正真正銘の處を書立てて皆様方へ御安心をさせ申し擡上掛けた騷動を先づく無事よ治め是等が新聞屋のお得意の嬢様がた常平生の御鼻眞に報いるところ先づ御心遣に氣を洗めてトツクリとお聞下さい
曰嬢ちやま方如何よも福助が紙められたよ相違御座いません併も美しくしい御嬢様よ紙められたよ相違御座いません併も決して生て居て毎度新富座で大入を取る福助が紙められさるので有りません此の福助の

お前立ッラ寫眞屋ふ居る福助がベロく遣られたのだめら皆様も先づ御安心新聞やも大安心をる河臺の御嬢様とばかり扱茫とした漸たが此お嬢様も大の新駒御鼻眞で何の芝居でも興行中ハ必ぞ毎日御見物よ渡らせられると云ふ御執心殊よ先頃の新聞座さどハ午後の興行と云ふのを午前も邸よ居るハ無駄たど日々早朝あら茶屋へ御入來ふあつて二階の欄干うら今かくと待兼ねて新駒比樂屋入を眺め給ふ程あるよぞ母君ハ此事を聞き給ひて流石よ外聞を憚り最愛は嬢が好くながら以來芝居見物ハ興行毎よ二度宛ふを

るが能いとの仰渡し左きれば新富座見物は差引既に
六日餘の借越あれば最う外の蓋の開くまで再び新駒
て見られぬゝと痛く落膽と給ひて物思ひよ伏し沈ま
せ給しをお附の女中達も心配して若し御病氣よでも
おらせ給ひてと由々しき御大事兎やせん角やと相談
の末責ての御心遣よもと御邸近邊の寫真屋へ注文し
て新駒の寫真數十枚を取寄せおまきと差上たるところ
嬢様ハ此上あく御悦びよて夜中御寢ある折よハ必ず
其の寫真の中一枚を御寢衣の懷よ納められ晝ハ又四
傍よ女中達の居らぬを見合せ數回る寫真を悉く文臺

の上よ並べて生たる人よ物云ふ如く八重垣姫を極め
られた末一枚毎にチウ〜チウ〜接吻を行ハれる
のでさしも美しくしい新駒の眞影も乾く間もなき沖の
石浮石の如く海綿の如く摺兀たると御嬢様ハもいと
兀あゝ寫真を取て呉れ〜ト是ハ福助びいきの新聞
浪枕夢の中村と題してある老先生が筆を採られた
のを御目よ掛ませせうエ〜
俳優は舞臺の愛敬渡世面部よ紅粉を粧ひ身よ錦繡
比衣裳を着飾り老をまゝりの頭上の雪も黒髪の鬘
を冠り額の皺を布で隠せハ不老不死の藥を飲むた

菊慈童も宜く是でも天保時代に産れ開けた世話場の
 壯人とも擬ふが一徳名人上手の立者のおひく、
 に籐がゆると素顔で見れば化粧目比娘達ハオヤ
 く、誰彼のはむりを御覽ひたひは丸で元山で鬢か
 らうしるは雪降の場で有ませと樂屋を覗いて二度
 桐りホンニ俳優は化物ですと三人寄れの姦しい女
 中連を上中下よ三分とても驚とちらすの黑白ハ誰
 が目ふも能くわかり一膳飯の乾魚の茶よりおなじ
 御馳走あら衛生料理の洋食に舌つゞく敲浮世の人
 情妾はとぼるは御膳より大好物狂言から何と見て

も面白いがふるさつ俳優ハ目よ古くさく成らふあら
 成駒屋比坊チャン脱り彼の福チャンが一幕でも出
 め舞臺から見物ハお廢一ですと紫服紗ふブツクを
 包み女學校へ通學のミスオイルも藝妓うら登用の
 細君も鹿戀女から成立ちの側妾も商個氣質紳士の
 嬢さん新柳二橋葎町日本橋新富猫ハいふも更ふて
 三座櫓付の金花猫芳原根津の女狐も寄るとたかる
 と成駒屋の息子の噂さ罷くびそらした且那どんも
 教育主義のお爺さんおりかさんも愛情のエレキよ
 繫がれ傍のけむりふ巻とまれて若い役者の其内て

は心がけなり品行あり他ふあゝ村福助ふ限る噂さ
 人氣ふ随ふふりがあゝの繪新聞も第一番目の序びら
 たふと金襖の社説むづかしい臺詞を譜べても雜報
 欄の二番目ふ毎日く福助の噂さを載せぬと幾
 干の紙數の賣口がへると權利を棄て新駒の噂ソレ
 出たヤレ引込むた如何して退ひぬとガラスに墨を
 塗て日蝕を見るよりエライ騒ぎ其實當人そ人氣ふ
 酔さぬるでい無いが持病の胃弱で恙ありしを大磯
 代禱龍館松本大ドクトルの開かぬ海水の入浴へ
 瀧車小半日の便利ふ出向入院中の水泳ぎあるひハ

温浴服藥の功能ハ疾よあらそれ避暑と治療の二階
 下小よるぎは磯濱風よ吹かれてお色が眞黒ふ成ふ
 ぬ様剛力笠の水をよぎハ裸体の關の判官擬死座頭
 の辨慶(團洲)どのも去る頃開館式の當日富樫(左團次)
 と共ふ義經の見舞かたく瀧車往復の便ふ出向た
 追々全快の様子を見て安心帳をよむたとやらさる
 程ふ福助ハ大磯ふ滞留中旅寐の夢よ蠟屐連中和し
 い聲の異句同音モシ福チヤンウらたが少く快くあ
 げたら近いやうでも東海道汐風り身ふ染ぬうちく
 けやも早くお歸京くと三夜つゞけふ見つゞけし

夢ハ正夢先一端いとまゝをして瀛車の迅速達者で
 歸宅ハサア目出たい父さん母さん一家師弟の大喜
 び海水浴の機能を第一福助のひんねりせはくり虚
 弱と胃病が不日よして忽地愈夫れふ和事師娘形ふ
 と不用とい言ひおがら航海數百里の波濤を凌ぐ時
 節柄俳優なりとて水こゝろが無くては成らぬ濱邊
 寓居も半月あまりわづらの内は水をよぎふ天晴水
 練の妙を得ると是れ龍神のおつかはえめ河童相傳
 の卒業生徒舞臺の外何事も器用の質と東京一般一
 百餘萬の人氣の加護と當人と朝夕共ふホ、敬めて

おん禮を申し居りまをと常の樂屋の内幕話し

是を病中のおはかし福助の病症ハ胃弱より腦充血を
 來し随つて神經も餘程手傳ひ夫が又た病氣ふ障りて
 彌々重ると云ふ容体なりしが斯く手重の病ひが俄ふ
 快よくなりまじ云ふ原因を聞くふ彼の市村座一月狂
 言の梅田神垣を著はされし川尻寶峯氏と云ふは夙よ
 心學を修め兼て禪理ふ深死人あるが性來の芝居好ふ
 て演戲改良の事ふも熱心されし處から福助の藝道勉
 強よて一格氣高き品格あり見識も尋常の俳優と同じ
 からず末頼母とき氣象あるを愛して平生深く蟲眞よ

され此程も病氣と聞て見舞よ赴むかれしが同人が神
 經質あるを兼て知らるゝより其過敏を抑へんが爲め
 徐ろよ禪理とて説聞かせ且の従容と申されしは凡そ
 人間は唯安閑と爲せとあく思ふとあくして居らるべ
 きものならざ病氣あるとして身体ふ何一つ爲せ事なく
 暮せば無事よ過ぎるが爲め却て心ふの何事う物思ひ
 が断えざるべし其中ふの愚よも附かぬとを苦よ病を
 遂よの神經を惹起して大きふ氣分を損じるなど却て
 病勢を助する道理あり夫よりを寧ろ聊かふても快よ
 く身体も少々の動かせる様よあらば運動がてら徐々

好ま道ふ従事せば大よ保護ふあるとも阿らん且の男
 子たるものハ藝事ふまれ何よまれ是や一の固く執て
 動かざる氣節あくてハ協はず若し此氣節あくハ世よ
 ありて有甲斐あく誠お死人も同様と云ふものあは和
 主も一旦身を俳優道よ委ねて人よも中村福助と云え
 る程よありたるうらと此末とも飽迄俳優を以て名
 譽を博し縱令死せる迄も此道よ従事せると云ふ堅固
 ある心掛あくてはあらず左れば一時の病氣あごよ悔
 よくと屈托せず病ひを扶けて舞臺よ上り格別骨の
 折れぬ役は勤めると云ふ程の氣節と惹起して如何

徒らよ病床よ呻吟するよりを却て保養よならんも知れず一つよと名譽は事ありと奨勵して歸られたるよ福助も大きみ氏は言に感せしとあてと見え其翌日市村座の出方某が見舞よ往たるよ福助は已よ床をあげさせて仕舞一月狂言よは是非出るから本讀みに必らど沙汰をして呉れとれとあるよ出方は何が叔心配から萬配して見舞よ云ふも實は様子をも見よ來たるよ思ひの外神速の全快よ喜びもし又喫驚もして段々家の者よ仔細を聞と全く川尻さんの御話で是々とのとふ出方は又喫驚し川尻先生ハ作を名人と承はりた

とど左様に病人は氣を引立てる秘法も御名人とハ授てもく珍らしい御方と早速取て返して進物を整へ急ぎ川尻氏に許へ禮ふ往きたり望のとなるが同氏ハ此後とも福助は病氣よ就てハ松本先生の醫術を以て治療せらるれば予ハ禪理を以て其心氣を鼓舞すべしと申し居らるよよし

以上の如く姫殿たちがもてはやしぬまふある俳優中村福助が身の上を尋ぬるよ本名を山本榮次郎といひ本年(舊曆)二十三才ふて舊幕徳川盛んのおる金座役人ハ一人なる土方政五郎か妾腹ハお何ふ擧事し長男ふして金銀

座の役人といへば何れも有福からざるかた中ふも政五郎は重役を勤めし事ある他の者ふ勝れて所得も多ありけきバ淺草橋場ふ住居なし家屋の普請ハ善を盡し美を盡したるのくからず風景東都第一ある名ふおほ川の流れをバ庭前ふ構へつと隅田の堤を東ふ眺是亦自然と庭園の趣きをあし南ふハ人まつ乳山淺草寺北ハ筑波の山下ハ風寒けきどギヤマンのうちぞめあとき置巨燧西ハ全盛并びなだめ吉し原もその頃ハ土手八町の駕籠の聲きしる車ハ響たと違ひ歸りもイキと聞えける人も羨む土地がらあれば常ふ出入りの繁きが中よそ金食ひ

虫と聞えたる帯間藝妓の引もきらず立入るのそハ花ふつ多雪よけ又月よつ多常ふ主人を煽動して場所の近きを幸ひと猿若町の芝居見ハ尤も烈しき事ありしが鼠眞の役者も數多ある中よて取分々愛しとしハ成駒屋芝翫ふて殊ふ土方の親戚ある深川木場の材木問屋野村某もともくハ深く芝翫を鼠眞よし兩人連立ち遊參の折ハ必らず芝翫を招く事の知る人珍しからぬまで噂しあへる程あり

星移り物換りて明治も八年を去年と過し明ればことし九年は春芝翫をいさくか暇を得たれば日來信ずる深川

の八幡宮へ参詣なし歸り路ふ圖らばも土方の事野村の
 事を思ひ出して數年前吾が若らゝりしその折ハ斯々云
 々の事ありとあど厚き惠みを受けし事の胸よかぞく
 浮びとまゝ世の變遷おいなはれ御機嫌さへも伺はせ
 久しく御無沙汰と打過ぎしハ吾あがり濟ざる次第爰
 て不思議お氣の付きしも八幡さまにお進めかせめては
 お店さきありとも伺ひて歸るべと元より實義の芝翫
 あれば夫より急よ木場ありける野村方を尋ねし處昨日
 の淵と今日の瀬と替るが常の世とを以へさしも立派ふ
 賑ひし野村の家ハ跡うたも絶えて見るべき影もあく狐

狸の巢窟とて此の野原をやいふあらんさとしてハ又果
 敢なき次第や芝翫を暫し茫然とりしが此儘歸るも本意
 あき譯ととへ如何程分散とあさるまゝとて大家の事尙
 ほそこ此處と問ひもせバお行く先は知れざる事よもあ
 るまじと思ひければ夫より近所の住居よゆきや懇切
 よ尋ねと處少しく様子を知る人あててアノ遙ろある茅
 屋お住居をあしてゐるまふハ野村氏の縁者の御方尤も
 是も近き頃引移られた事あれば委しい事を御存じであ
 るかあいかハ分らねど兎も角尋ねて御覽あれといふよ
 芝翫ハ喜びて早速同家へ至りし處這ハそも如何よ主人

といふハ曩さきに一方ひかたならざる曩いひ眞まことを受けし橋場はしの土方かたが
 妾めかけ何なにといへる者ものよて榮次はじ郎ろうと今いま一人ひとりの娘むすめを養やしなひ殊ことハ
 又また老母らうぼを引取ひきとり親子おやこ四人よにんが昔かたじの姿すがたととるやら漸すす々ずその
 日ひを送おくるる隣となりれ果敢はかなき境堺きょうがいあれば芝翫しげんハ再またび打驚うちおどろ
 き取敢とれず懐中くわいちゆうよ持合もちあせたる分ぶんたけを底そこをばらひて惠めぐみ
 つゝ其そのうち改あらため伺うかがへば必かならざクヨゝ思おもし召よすなと慰なぐさ
 めおいて立戻たふもどりしが此折顔このせりかほを合あせたる彼かの榮次はじ郎ろうの容かほ
 貌かほうら動止たふよまれまとやゐさ且かつつハ怜悧れんぎよ見みゆるよ芝翫しげん
 ハゆくゝ思おもふ様よう我われ不幸ふこうよも今日こんにちまで跡あとをやるべき
 子供こどもあきハ常々つとく嘆なげく處ところなるよ今度いまど實まことにゆくりあく廻めぐり

會あひたる那そのハ少年せうねんハ尋ねてもなきよい子こ柄がら河原かはら乞食こじきと
 いはれたる昔むかしと違ちがひて當今あたうまハ開ひらけし御代おんよの有難ありがたさハ役やく
 者もので立派りつぱよ世よの中なかを渡わたりてゆかせる事ことかれを那そのの子こを
 貫つらつて世繼よつぎとなし藝道げいどうを仕込しこもせば曩いひ眞まことを受けし人ひと
 ふ對たいし幾いくらう恩おんよも酬むかはれる夫つまのみならざ差掛さしかり今いまの
 難儀なんぎも救すくはれるし第一だいいち此身このみも安心あんしんし樂たのしみにもある事こと
 ゆゑ相談さうだんあして見みんものと夫つまより芝翫しげんを女房にようぼうよも其趣そのおも
 きを打明うちあけて寫かきと嘶なげしをしたる上うへ尚なほは有名ゆうめいの人々ひとびとよも
 相談さうだんあして何なに方を再またび訪問かへんれ云々よくよくと思おもふ仔細しさいを打明うちあ
 しゝよ何なにハ更さらなり本人ほんにんの榮次はじ郎ろうも深ふかく喜よろこびお頼たのみ處ところ

か此方より願ふ處と早速相談整ひ改めて芝翫方へ貰はれしは榮次郎が十一才の六月上旬比事なりし扱も芝翫と榮次郎を養子とせし以來女房とくも心を添へて藝道よ身を委ねし元より伶俐の質あれバ僅よして稍やその筋を覺ゆしより藝名を兒太郎と改め養子の弘めを爲しとる後中村宗十郎が新富座よおゐて近江源氏の盛綱を演せし際悴小太郎の役を勤めし初舞臺の評判よく是より一層技藝を研究あし其より師と頼しは花柳に植木店の藤間あるが兒太郎の榮次郎は既よ前よも記せる如く貧しき中よありて老ら其美しくし

さ姿の人比目よとまる程ありしよ今芝翫の養子とありてあらハ朝夕よ身を清めると比怠たる時あなれバ愛敬さへ一層目立て顯れ加ふるに養父母よ事へて孝心深くうりそめよも語をあへしたる事あまきハ芝翫夫婦ハ勿論出入の人々譽たよよは養子をしたたり末頼母しき事ありと評判し夫が爲め又芝翫の名さへ一倍世に高めるまでよ至りしが折節生の母が身まありて老婆と一人の妹が貧しき他人の手に在りて艱難を重ぬると深く悲しみ如何よもして助けやらんと種々心を碎きしも吾身すら義理ある人比手よ育てられて海とも山ともさやへん

方お大恩を受るる中も如何も兄妹老婆の事あれば
 とてその上も世話をしてとも言ひ出しかね去りて
 他も頼らん人もあなれを不愆のものやと日夜人知れど
 胸を痛めしが積り積つて顔色も見え且つ太息がちよ
 ありしを斯る事ふはぬかりなき養母が若やその事あら
 ん其事あらんふは實に氣に毒の事かれを兩人やも引取
 り世話をしてやるべしと早速掛合を申し兒太郎も
 二三日うちふは呼寄せるほどよめく心配するあり
 れど今も始めぬ養父母は慈愛ふ兒太郎は吾身を救もる
 によりも嬉し喜びて厚く禮を述べ續いて老婆とともよ

妹も吾家へ引取られ何かと目をかけらるゝかど恩儀の
 いやく深きと感じますく振つて藝道も勉強し將た
 書ハ濱町の山内先生も學び畫ハ渡邊小華翁の門ふ入り
 唄三味線ハ杵屋六三郎の弟子とあり併せて岸澤式佐も
 りきて常盤津を覺はまた上るりの鶴澤勇藏も依て修免
 下方および謠ハ壽鶴氏の仕込ありそれ他詩歌發句茶道
 活花等皆その師も從がつて勉強をし一秒時も手を空と
 く決る事あかりと斯くて翌十年の十月芝翫も伴はれて
 尾州名古屋へ出發ると同所にて興行の終るを待て伊勢
 苦崎へ行き夫より兵庫堺西京と興行と廻りく復た

讚岐比高松備前の岡山美濃の大垣引戻りて三州豊橋よ
 りとんとて筑前博多へ出で夫より筑後の久留米肥前の佐
 賀八代長崎を経て長州下乃關へ至り萩山口を興行し尙
 尾の道より廣島徳島高知和歌山神戸大坂と足かけ五年
 間旅路を廻りて十四年の五月久々ふて東京へ立歸りお
 の折新富座中まくよ父芝翫の出まもの扇谷熊谷を挾く
 し時團十郎の小萩實ハ敦盛よて姉輪の平次と菊五郎が
 勤め扇谷比娘桂子を兒太郎が守田勘彌比勤めよ依て中
 村福助と改名とて勤めとが多年旅の憂を忍び少年あが
 りも折々大役を勤めなごせしより此の患苦藝道の上達

を導くのもとるどあり桂子の役評判高く父をはじめ團
 十郎菊五郎といふ當時雙ぶも比あ上手の中よ立交り
 更に見劣りあかりしかば府下の人々始えて福助の美し
 くして且つ舞臺を大切よ勤めるを愛し新駒屋の聲場中
 ふ鳴渡りたり同年父芝翫比出し物ふて法戒坊を演せし
 折ハ故人岩井半四郎がお組なりしハ病氣ふて引籠りし
 ろハ代はてて福助がお組と勤めしふ可憐の態ハ却はて大
 和屋よも勝れりとの喝采を博し又本郷春木座にて團十
 郎が小野の道風をせし際も半四郎の代りを勤めて人望
 を得し事あり又十七年の一月猿若町二丁目市村座よて

福助あゝやを勤めしよ其出来無類あるより一層人氣を
 増し十八年新富座よ於て助六の狂言よ揚卷の助高屋病
 氣ふてよんどあるあく大役の代りを勤めしよ是亦意外
 の出来なりし又一昨年の春市村座よて鏡山の狂言よ於
 初を勤めしよ評判よりしが此ころより病氣の氣味あ
 りしよ平素勉強の質あるよめて服藥中ふもかゝらざ
 出勤あし既に昨二十年の如きハ左ふ掲けし如く各座へ
 出勤し立役女形ともふ大役を勤め何れも大評判を取り
 といハ此年輩ふして此人氣と此の技藝ある實ふ近年稀な
 る俳優といふべし

明治二十年新富座初興行ハ去年の一番目と置に二番目
 よ菊五郎が浪人吉住勘解由の碁磐切りを出せしよ福助
 ハ勘解由の娘お踐を勤め同年二月十一日開場の千歳座
 ふてハ菊五郎と親芝翫その他家橋我童の一座ふて福助
 ハ時鳥ふ小織之助と上るりの大黒天を勤めしが時鳥殺
 といよ菊五郎は百合の方その仕打老練あるを以て福助の
 時鳥も一層引立ち見物をして涙よ咽うへらしめしが此
 興行總じて大評判ふて正面棧敷下を取除け土間を擴め
 しよ尚は客止めの大景氣ありし續いて市村座ふて團十
 郎が地震の加藤と荏柄の平太を出せし際福助ハ千歳座

と掛持の都合ふて千葉成胤の一役を勤めしまでありしが三月九日とり開場の新富座替り狂言よハ扇屋熊谷團十郎の直實にて福助を小萩實ハ敦盛を勤めしハ團十郎と立井びて見劣りあま上評ふして前比時鳥といひ實ふ昨年きのねの福助ふくすけあらざとの喝采かつさいを得大切たいせつの戻り駕かこよ次郎作じろさくの團十郎だんじゅうふ四郎しじゅうの菊五郎きくごじゅうとハもふ福助ふくすけのあふる評判ひやうばんよく同月二十九日どうげつにじゅうじゅうくにち初日はつにちの市村座いちむらざふてハ團十郎だんじゅう芝翫しばん我童がどうの一座いざにて一番目忠臣藏いちばんめちゆうしんざう二番目國姓爺にばんめくわんせいやと興行こうぎやうせし際さいハ力りき彌やよおかると錦祥女きんしやうにょを福助ふくすけが勤め是亦これまた大人氣おほじんきなりし扱さく四月二十六日しがつにじゅうろくにち二十七日にじゅうしちにち二十八日にじゅうはちにち二十九日にじゅうくにちの四日間よっぴにちかんと井い

上外務大臣じやうがいむだいじんの麻布鳥居坂あさふとりいざかある別邸べつていよおいて芝居しばいのおん催もよほとあり二十六日にじゅうろくにちよハかしくくも 聖上臨幸せいじやうりんきやうまし〜て天覽てんらんありぬ此日このひ福助ふくすけハ勘進帳かんしんちやうよて義經よしつねを高時たかときよて腰元こしもときぬ笠がさを勤め廿七日にじゅうしちにちよハ皇后くわうごうの宮行啓みやぎやうけいありて孝源氏かうげんしよ牛若道行うしわかみちゆきふ静しずかを勤め翌あした二十八日にじゅうはちにちハ各國公使かくこくこうしの見物けんぶつあり二十九日にじゅうくにちふハ皇太后宮くわうたうごうの御覽ごらんよて忠臣藏ちゆうしんざうふ力彌りきやを六歌仙むつかせんよ茶汲女ちやくみにょを勤めしハ俳優道はいゆうだうのことよをハ榮譽らいよふありと父ちちの芝翫しばんを更さらかり御前ごぜんふ出いででし人ひととハもふ感涙かんだいを催もよほしたりと 斯しかうる次第しだいなれば福助ふくすけハ人氣評判じんきひやうばんハ日一日ひいちにちより増まして

同年五月市村座よてハ吉村の娘千代咲ハ愛妾初花と小
 町姫實ハ墨染櫻の精を勤め此折市川團十郎わざ〜同
 座へ出勤シ父芝翫ハ附添ひて福助が名題ふ登りたる口
 上を述べたるが六月三日より開場の新富座にても福助
 と勘進帳ハ義經を五人男ハ雁金文七を大切りふ上るり
 姫と勤め同じく名題ふ上りし披露を爲せしが此時ふと
 ハ團十郎の雷り庄九郎菊五郎の極印仙右衛門左團治の
 安の平兵衛芝翫の布袋市右衛門といふ千兩役者の顔揃
 ひよて披露を爲せしハまた此道の名譽ありとて當人福
 助ハ勿論親芝翫の喜びハ多とふるふ物あかりしとぞ左

ふさうづ左もゐるべし爰ふ前年大坂より中村座へ上り
 たる中村福助とハ同姓同名の事あるより何れと世間ふ
 風説のまびきしくおの〜最原の惣目より彼ハ偽是ハ
 眞との評論もありて爲めふ芝翫の如き温順の者ふて
 ら大いふ心を痛めし事ありしも夫れ〜和解の手續き
 ふありて九月二十六日より興行せし中村座へ成駒屋福
 助も出勤し高砂助福助と顔合せせしたるが此際成駒は
 たんまりふ淡路比浪丸を雲雀山ハ中將姫を荻萱ふ夕ひ
 ぞを勤め何れも評判よく殊ふ中將姫を勤めるよとを東
 京繪入新聞社の假名垣魯文翁が聞かれ翁が前年京坂地

方を漫遊されと折奈良の當麻寺に在りし金地に當麻中將姫藕糸の曼陀羅と記きたる聯を得て持歸らる常ふ愛翫されまをば芝翫附の作者松島松作子の手を経て福助に贈られしより同人の喜び一方からぎ是より一層扮装等ふ精心と凝らしたるより一夜中將姫の尊影をありく夢よ見るふ至りしといふ

扱新富座よて守田勘彌氏こと古河新水氏が丹精を擢でたる三府五港寫す幻燈といふ新作を興行せる事な

こ十月二十日初日を出せしところ團十郎の菱戸治平左團治の三倉富藏等何れも評判よきふ福助の娘おくと近

藤雄次郎とも更よ見劣りあく目下活歴風の流行せるを能く比こ込ての仕打ち實は感服ありとの樽高かり次で十一月十七日より興行の千歳座の芝居に福助は清姫を勤め日高川の人形身も評よろしむ此興行不入りよて早々よ仕舞とありしを残念この月廿一日より菊五郎高砂屋福助家橘松之助等の一座ふて中村座ふて因幡小僧を演せしよ成福のおし元小萩相替らる上評なりしが兼ては持病再發して遂ふ勤め負せず半途ふして自宅ふ引籠り病ひを養ふふ至りしは月冴んとして雲之れをさえぎり花綻びんとして風これと破る彼の二豎福助此人

氣高を嫉みておの妨碍を試みし事あるを
 聞く福助の病症ハ慢症胃病にして神經ニ關する症ある
 より常ニ同人を最良とさるる松本橋本の兩軍醫總監高
 木海軍總監伊東侍醫の如に親しく診察せられ既に新富
 座において各題ニ昇りし披露を爲せしころも一時宜し
 うらざりしを大磯の海水浴にて健康ニ復し尙ほ當分ハ
 家ふ在つて保養すべしとの事なりしも何分目今の人氣
 役者この人出勤せざる時は大いニ客の足取りも障る
 と各座主より芝翫夫婦へ迫りてことへ一役ありとも出
 勤してとの依頼あり勧めあり人をばけたりて此照會ニ

元より藝道熱心の福助あれば聊かふても心地よき折々
 切角の頼みは無解ニ斷るも如何あらんと自ら望んで是
 まて押して出勤せし夫等の所勞の積りて斯くは是非なく
 引籠る事ふなりしといゆるが爾來各國手は盡力と芝翫
 夫婦その他介抱の等閑あらざると本人が養生の道宜し
 きふ適しあるとよ依りて追々快方に赴き今回開場の市
 村座初興行ふは團十郎芝翫我童松之助新上和三郎等
 とよもよ出勤して中まく會稽源氏雪の白旗と源九郎義
 經の役ふて團十郎の相手を勤めるふ至りしは座主の喜
 びは更ふり同人を最良とせらるる看客數十萬の喜び知

るべきありいとめでたし
 右記し了りし後尚ほ特ふ出すべき箇條あり开は福助が
 品行に關する事にて同人は前年徴兵適齡ふて既よ検査
 を受けしも体格不合ふて免役とありし程あれハ平素病
 身とをいふ既よ壯年よ達しさるのとか婦人女子の同人
 を愛顧ふさるゝ事は前項の評判記ふも見ゆる如くあれ
 ハ素人社界ふもありがちの女沙汰ましてやこの容貌と
 ことハ人氣とを得たる俳優のこと一二の記すべき噂はあ
 き能はざる筈なるよ毫もさる事なく實際は品行よ至り
 ては評判よ勝て正しく斯ばかり心と寄せる婦女の多

かるも更よ顧とし事なく最眞客より招かるゝ事ハはせ
 んど餘日あき位あれども其席上婦人女子の客のみあり
 と聞く時と常ふ如何ほど愛顧よさるゝ客なりとも堅く
 断りて出でせ平常親の語よ背さし事あきも此事はみハ
 親は進めふても決して聞入れずたまゝ男客も一座あ
 ると詐りて出で者ありとに一禮したるまゝ直ちよ袖
 を拂ひて立歸りしより却て客の不興を受けんを恐きて
 その後と誰あつて詐はる者あきに至りしと然れハ同人
 ハ此業体ふして此年齢よなり未だ婦女の快樂を知らざ
 るを以て或ハ病發を助けもやせんうと芝翫夫婦は常ふ

心配してゐる程なりといふ

因とよ記に本傳を記載するに際し養父母中村芝翫夫婦の履歴の大略を聞得たれば併せて左に掲げぬ

中村芝翫元大坂の産れおして三人の兄弟あり兄を雀之助弟を政次郎といふ安政の頃等しく江都に下り市村座より出勤せしが雀之助を間もなく浪華に死し弟ハ福助と改名し藝道追々上達し評よかりといふ惜むべし廿五六歳ふて同じく浪華に死せり芝翫は四代目芝翫は養子とあり養父歌右衛門藝道當時並ぶものあり故三津五郎(森田勘彌)と肩と並べ均しく名聲高く此時市中に勝見連と

稱する見物あり三津五郎の庇蔭ありまた芝翫も成駒連おぞと稱して勝見連と競争ひ其勢を張りしが劇場繁榮は時ハおれより昌んあるはあく且四代目歌右衛門は座頭の位地になりて一座の束ね諸俳優の冠たるも此古來此人ふ止まれりといふ養子福助生來虚弱ふて稍成長するお隨ひ癩癩の症を發し嘉永年間養父と共に浪花おのほり舞臺を勤めされども如何よせん病ひ不時に發して其危急に及ぶと屢々おれハ養父歌右衛門は是れを憐れみ醫藥の費を厭はせしめて養生せしむといふども病ひ益々劇しくおりしゆる餘義なく離縁せる事よおれり

此時江戸市村座の帳元澤田屋和助といゑるもの歌右衛門と共に浪花に在りしが福助の離縁を聞きて思ふところありしか數回乞ふ事ありしより歌右衛門ハ福助の名を其儘よしして和助が望みよ任せたり後年養父歌右衛門病死せし以來は和助の福助を養育せると恰かも我が實は子の如くあれバ福助もまた彼の難病を治さんと神佛よ祈り名醫の診察をうけしよ一心爰ふ貫徹しよや漸やくよして病ひ平癒せり然れども此故う少しく放心の性よ變せしハ氣の毒ある事どもあり斯くて和助ハ福助と同道として江都よ下り續いて養父歌右衛門の墓前よれい

て再縁の約を成し即ち中村福助よて市村座よ出勤せしめしよ福助ハ愛敬他人よ勝を大いよ後年の望よを惹起せしハ養父が一度棄てたるを乞ひうけし程あてて和助の先見明瞭あると驚くべし福助生來温順よしして少しも人の詞よ背かざるより或ハ愚鈍ものあぞとの惡評あれど邪しまの行ひあき故よ平凡ならぬ一種特別の愛敬ありて最厚頗る多く譬へバ成駒屋を愛する諸客ハ一宗門の信者のごとく是れを尊敬ひ餘を顧みざるありさまよて就中日本橋魚河岸其他の俠客頗ぶる最厚厚きハ他の俳優の及ばざるとあるあり安政よて萬延の頃市川市藏

と共ニ世ニ評判高く一座出勤の時は見物競争で賞譽を
 さまを養父歌右衛門が三津五郎と競争し昔日を觀ると
 同じ姿なりしされば幾程もあくして父の先名芝翫と改
 名しとり然るふ當時大坂ふて故三代目歌右衛門梅玉加
 賀屋といふの筋目現存して四代目ハ門弟あつた芝翫を繼
 ぐハ梅玉の血統ニほらせれを之を許さぬとの故障をい
 ひ越せぬが兼て愛顧をうくる魚河岸の人々大坂の故障
 を不當ありとし押して終ふ芝翫を繼がとめたり芝翫を書
 を中川憲齋翁ニ學び松花堂の風を慕ふ且生質番匠の業
 を好み箆笥箱類を細工するに其精密ある尋常其道の職

工の遠く及むざるにあつたは天然乃器用といふべし
 明治以降新富座ニ出勤せしニ同八年の祝融ニ遇いて同
 座焼失せしより芝翫は暫らく休業せしが或人の勧めふ
 て西國ニ旅行する事なれり是より先芝翫は新吉原尾
 張屋何某の長女を妻ふ娶りしふ生質男子ふ勝りて能く
 本夫を補佐々内外をべて裁判をかゝ且芝翫は放心の質
 なれば代つて門弟をあつれみ諸事ニ心を配るより劇場
 社會の人々ハ此妻を譽めざるものあつた旅行中も妻本夫
 よかしづき大坂より中國九州各各國を經歷興行毎ふ大
 入をなし大くの金を得たり然れども芝翫が藝道當時團

十郎菊五郎も及ばぬ且時勢の變遷もあれば夫等を深く
 思ひ是迄の借財を返金ある本夫比一身と軽くせる事を
 心掛旅中の患苦を忍びて終に借財の八分を消却したり
 と然るも同十四年新富座より芝翫ふ再び歸京を促がせ
 しかば夫ハ是迄他國を經歷といへども未だ故郷ある大
 坂の芝居に出勤せざるは夫の爲残念比事あればせめて
 同地ふ名残り狂言をかた花くまく東京に上らんと思
 ひ立終に戎座に出勤する事とあり此時季候初秋よまて
 いまた残暑つよよりけれむ芝翫に勸めて紹の小紋染三
 百余反を誂らへ是と悉く同地の藝妓幫間と與へて土産

とす此費三千餘圓また芝居係のもの等へハ夫々土産と
 して若干を贈り此費合せて五千圓ふ近しと芝翫の依
 氣三都ふ並ぶものおしとまで其名京坂ふ著るしかりし
 と皆妻女の計らひありに扱芝翫が平素の行狀其滑稽の
 二三を掲ぐまハ同人廿年前までは火事を好み遠近を論
 せむ如何ある寒夜ありとも必らば火事場に至る然るゆ
 ゑふ其扮装物なきを盡して頗ぶる美麗あり或冬の夜某
 町に出火あり芝翫勿起て彼れ装束を着替んとて此時さ
 きよ火元見ふぬきたる門弟歸り來りて親方もう火事ハ
 消えまじたと云ふ芝翫いと不興氣の体ふて己が行く

までもう少ゑ火事を消さず置てくれ、バいゝふ空
 太くゆふやきしとぞ其滑稽思ふべし又或る諸侯深く芝
 翫を愛せられ毎度御殿に召れしが或日同人に金側比時
 計一個をいたし汝ふ與へんとて兼て調へ置たり是は船
 來品のうちふても尤も上等の品あり汝持料よせよや仲
 せありしかバ芝翫ハ有がたく受取御前此御時計ハ矢張
 十二時のドンの時巻のねハ時間ガ狂ひまきりと伺ふ候
 その通りと答をたまへバ芝翫ハ其時計を候の御手へ返
 し十二時毎ふか多まを時計あら面倒ゆる御返し申上ま
 を受て更ふ頓着せさきバ候も其無欲なるを愛し左様あ

ら何品ふても望めとの御意ふ芝翫ハ暫し小首をかたげ
 しが夫てハ御麻ふ繋いでござりませ御召の御馬を拜領
 いたしたうでござりますと望しよぞ候もあハ面白しと
 直ちに乗馬を引出して賜はりしあハ芝翫のよろこび譬
 へんふ物あし然れども門弟どもハ武家の宅と違ひ麻も
 あし馬を飼もれもあふと案事たれど芝翫ハ彼の馬を
 拜領して喜び勇んで宅へ歸りまづ格子戸の内ふ繋ぎあ
 れば門弟等ハ手桶の手を切りて飼を桶とあし出來合の
 別當とあふあごその混雑言バありあし扱二三日過て御
 邸より別當兩人を遣ハされされバ芝翫ハ大よろこびふ

て帽子を冠り黒紋付は襦袢高袴を履揚々と拜領の馬は跨りまづ淺草觀音に參詣せしは馬丁の主人侯の印しある法皮を着たれば往來ふて同じ華族は方々あるは貴顯の方々も出遇度毎ふ彼の諸侯あらんと帽子を脱ぎて會釋あるより芝翫も餘義なく同じく帽子を脱して答禮をかまふ例の結髪ふて疑ふべうもあらぬ俳優の芝翫なれを挨拶ありし方々もお笑ひあひりて別れたまひしと芝翫を思ひがたず貴顯の方々も出あひ帽子を取の迷惑さよ弱りきり乗馬の儘彼の華族の邸を参りてみんが窮屈をお馬に返上まふしませとて其馬を返し奉まつりしと

おん當時ふても各座とも古例を崩さざ大てい月々の三日(即ち舊曆の朔日十五日廿八日)を座頭其外重立たる役者と黒は紋付を着して樂屋の部屋へお目でたふと挨拶をかまの仕來りなりある時のみと例の如く三日ふ當り茶をば妻をさふと朔日あれば黒紋付を着てお出なさいといふは芝翫は妻に向ひ三日といふは月一幾日ありやと問ふ妻は答へて朔日十五日廿八日ありと芝翫然れば朔日より十五日迄の日數十五日間ありまた十五日より廿八日迄も十三日あり既ふ一昨日三日ありとて黒を着せたり僅うよけふで三日計りしう立ぬにまた三

日のある道理なしとて承知せど妻を夫ハ此月は九日晦
 日もある中一日おいて直けふ朔日あればありと分明論
 せしも芝翫ハあかく承知せずあんのく巳を欺して
 紋付を着せやうやひりてもさう甘くハ欺されるものう
 と承引する氣色なかくと云ふ同十四年久しぶりよて
 芝翫東京へ歸りしが劇場社會も追くは開化とあて團
 十郎をじめ俳優を殘らず散髪よて結髪のあるのは同人
 と悴の福助のともあれば三階ふは下めて來りし時いづれ
 も天窓を見てヤア團十郎さん初め皆ああまが西洋造
 りたといひしも可笑又同時まづ新富座の芝居表が、り

を見しふ舊來ハ眼を一洗したれば何となく芝居の思ひ
 をあさずそれより案内のものを樂屋を御覽なさいや表よ
 り裏手樂屋口は方へ廻り諸所を見せしふ樂屋の壁例の
 あまこかべあれば矢張以前の大名やしたと思ひしが案
 内の者ふみれハどあの水屋敷たと聞しとろ芝翫の愛敬
 あるお話しは澤山あれと事繁ければ大方を省く

○梅見時春ふ成駒終

明治廿二年二月廿二日印刷
明治廿二年二月廿四日出版

(定價卅五錢)

發行者

京橋區本材木町三丁目七番地
石川 傳吉

版權所有

印刷者

編輯
京橋區南鍋町二丁目四番地
上條 謙重郎

出版所

明二堂

京橋區本材木町三丁目七番地

取次所

正文堂

京橋區南箱町十八番地

